

佐竹曙山と平賀源内の著書に記された「蛮(番)産」顔料

種 倉 紀 昭*

(1990年6月30日受理)

はじめに

佐竹曙山(義敦, 1748寛文元—1785天明5年)は江戸時代中期の秋田藩主であり, その家臣, 小田野直武(1749寛延2—1780安永9年)と共に, 漢画の南蘋派の素養を基礎にして平賀源内(1728享保13—1780安永8年)の指導により, 秋田蘭画を創始した。秋田蘭画成立までの経緯や, 秋田蘭画の理論的背景, 技法の特徴, 洋風画全体に占める位置等については, 平福百穂, 西村 貞, 外山卯三郎, 小野忠重, 成瀬不二雄, 武埴林太郎諸氏等の先学の研究がある。また, 源内については, 城福 勇, 芳賀 徹氏等に依る研究がある¹⁾。

本稿の研究の動機及び目的は以下の通りである。

佐竹曙山『画図理解』(1778 明和7年)の「丹青部」に著された蘭画(洋風画)に関わる「番(蕃)産」(西洋産, 東南アジア産)の顔料名のうち, とりわけ「コラルド」²⁾(以下, 『コラルド』と記す。)と「ウエウレルトアウプ」について, また, 幾つかのものについて, 解明が充分になされていないことが, 本研究の動機である。

本稿も, 結果的には全部の解明には至らなかった。しかし, 所期の目標の一つは, 西洋画材料論の立場から, それらの解明に一歩でも近づくことであつたので, 難解さの程度を実感できたことも一つの収穫であつた。「ウエウレルトアウプ」については「コラルド」より更に確証は得られず, やや堂々巡りの感はあるが, 推論を試みた。全体として, 源内と曙山が手にした, あるいは名称を知り得た顔料は当時の西洋画顔料として何であつたかについて, 解説を加えた。

1. 『物類品鑑』³⁾, 「丹青部」に共通に著された「蛮(番)産」の顔料名について

平賀源内『物類品鑑』, 佐竹曙山『画図理解』「丹青部」に共通に著された顔料名のうち, 「蛮産」または「番(蕃)産」(西欧または東南アジア産)⁴⁾の顔料名について調べよう。「ベルインブラーウ」(源内『物類品鑑』)については, 平福百穂『日本洋画曙光』(岩波書店 1930 p. 12)が「丹青部」の「ベルレンスブラアウ」を取挙げ, 「伯林青 Bellijusch blauw で今日の所謂普魯西青 Prussian blauw であると云われてゐる」と解説し, 外山卯三郎『日本初期洋画史考』(建設社 1932 pp. 120~21)が同様に, Berlinsh blauw とし, 芳賀 徹『平賀源内』(朝日新聞社 1989 p. 143)がオランダ語で「Berlijn blauw」とし, いずれも英語の

*岩手大学教育学部

Prussian Blueとしている。この説明は正しい。

この顔料は、ゲッテンス、スタウト共著、森田恒之訳『絵画材料事典』（美術出版社 1973 pp. 146-7）に依れば、ベルリンの染色業者で塗料メーカーでもあったディーズバッハが偶然に1704年頃発明したフェロシアン化カリ鉄 $\text{FeK} [\text{Fe}(\text{CN})_6]$ である。

ちなみに、森 林太郎、大村西崖、久米桂一郎、岩村 透『洋画手引き艸』（画報社 1898 17才）にはドイツ語でこの顔料を示した Berlinerblau の記述が見られる。

「スバンスグロウト」についての外山「同上書」の「西班牙緑 Spanish groen」はほぼ正しい。正確にはオランダ語で、Spaans groen が正しいと思われる。源内「前掲書」の標題の「緑鹽一名石緑⁵⁾」と「スバンスハ国ノ名ナリ。」に基づく妥当な判断である。芳賀「前掲書」(p. 350)でも、「スペイン緑」としている。しかし、あまり今日では一般に見慣れぬ顔料である⁶⁾。

福田邦夫『ヨーロッパの伝統色』（読売新聞紙社 1988 p. 85）に依れば、「Verdigris」（1336）の英語別名は「Green of Greece」であり、ラテン語の「Verdi hispanicum」も同色で英語に転じて「Spanish Green」（1400）となったとしている。

チェンニーニ著、中村 彝訳『芸術の書』（中央公論美術出版 1964 p. 79）にも、「ヴェール・ド・グリ」は、「化学的に銅と酢とをもって製造する」、「紙もしくは羊皮紙の上に、卵を混ぜて使用するに最も適している」顔料であると記されている。板絵に卵テンペラで用いるのに適するが、耐久性が無く、フレスコには不適であるとチェンニーニは説明している。

古代から19世紀にかけて西洋で用いられた「緑青」[Verdigris] はプリニウス Gaius Plinius Secundus (23/4-79) の『博物誌』*Historiae Naturalis* の第34巻26（中野定雄・里美・美代共訳 雄山閣 1986 第三巻. pp. 1390-91）にもその製法が記されている。

Thompson, *The Materials and Techniques of Medieval Painting*. 1936 Dover Pub. (pp. 163-64) に依れば、熱い酢の上に銅板を吊るしたり、銅片を葡萄の絞り粕で蔽ったり、鏝（やすり）状の銅に酢を加えたものを擦り砕いたりして中世の西欧では大量に作られた。この方法は、プリニウスの記す方法に倣っている。

Verdigris の語源は Vert de Grèce（ギリシャの緑）と云うフランス語の短縮形 Vert-de-gris に由来する。化学成分は塩基性酢酸銅 $\text{Cu}(\text{C}_2\text{H}_3\text{O}_2)_2 \cdot 2\text{Cu}(\text{OH})_2$ である⁷⁾。

イタリア語では verderame と呼称し、フィレンツェの某画材店で売られている。

Mayer, *A Dictionary of Art Terms and Techniques*. (A Division of Happer & Row. New York, 1969 p. 420) には、17～18世紀にスペインでヴェルデグリがリンシードの乾燥促進剤（ドライヤー）として使われたことが記されている。

「コラルド」については、以下の平賀源内「前掲書」を佐竹曙山「前掲書」の「丹青部」はそのまま部分的に踏襲している。

「コラルド。和名シャムデイ。此物往年暹羅人長崎ニ持来ル。然ドモ本邦ノ人其用ヲ知ラザルガ故ニ、是ヲ買ハズ。因テ暹羅人是ヲ海中ニ投ズ。今稀ニ長崎海中ヨリ出ズルコトアリ。故ニシャムデイト云。研テ画石ニ用テ赭黄色ヲナス。秋景中山腰ノ平坡、草間ノ細路、深秋草木、又ハ松幹類、此物ヲ用テ甚ダ妙ナリ。本邦ノ画家、銀朱、墨、藤黄三物ヲ合テ此色ヲナス。然レドモ碟子ノ中ニ銀朱ハ沈ミテ底ニアリ。藤黄浮テ上ニアリ。墨ハ中ニアリ。三物交リガタシ、漢土ニテハ藤黄中、代赭石ヲ加テ赭黄色ト名ク。是亦代赭ハ沈ミ藤黄ハ浮ム。コラルドノ自然色ニシカズ。○蚕産

上品。○伊豆田方郡湯ヶ島産上品。辛巳歳予始テ是ヲ得。壬午主品中ニ具ス。」

以上は、仮名混じり文として掲載されている、平福「前掲書」(pp. 4-5)より引用したものである。なお「丹青部」(平福『前掲書』p. 25)では、「コヲルト」となっている。

藤黄は正式には藤黄、俗称を雌黄とも云い、マンゴスチンの樹脂(有機ガム) Gamboge ガンボージで、透明な黄色をしている。東洋、西洋で何世紀も昔から使われていた⁸⁾。現在も日本画材料店で販売されている。さて、上記、源内の説明では「コヲオド」の色調は黒ずんだオレンジ色となる。朱(HgS)、墨汁、ガンボージの順に比重が小さくなるので、また、中国の方法(代緒石とガンボージの混色等)で「コヲルド」の類似色を作るのは困難であることが説明されている。

外山「前掲書」(pp. 120-121)では、「トルコに多く産しているアンバア Umber かさもなければ Vandyke brown に相当するものではないかと考えられる」としているがその判断の根拠は示されていない。また、源内筆との説のある『西洋婦人像』(当時、鹿田静運堂蔵、現在神戸市立博物館蔵)の説明として、「色彩はあまり用いられてゐない。その主要なものは、着物に描かれてゐるブリュン・ルーヂュ brun rouge と、リボンと首飾の円形装飾に朱 Vermillion が用いられ、《中略》着物を描いてゐるブリュン・ルーヂュのやうな色彩が、源内の言ふコヲルドではあるまいか。」としている。

しかし、「brun rouge」(フランス語)が Ocre Rouge (Red Ochre) と同じであればなおのこと、Burnt Sienna あたりを指すとしても、先の同氏の(黒褐色)説と矛盾していると言わざるを得ない。

福田「前掲書」(p. 35)では、「Copper Red」の説明として、英語の Cauldron、フランス語の Rouge Cuivré, Chaudron を挙げる。日本語の赤銅色で、スペイン語で釜やポイラーのことを指す Caldera の色からコールドロンの名称が出来たことが記されている。「コヲルド」が西洋語であるとするれば、関連があるかも知れない。「イングリッシュレッド」に似ているとする解説から、カラー図版を見ると、ダル(d)トーン(p. c. c. s)⁹⁾のオレンジ(あさい赤味の茶)に近い。

「コヲルド(暹羅泥)」の括弧書きの説明で「シャムでい」と読ませる、芳賀「前掲書」(p. 148)の解釈は、源内の「前掲書」の「故ニシャムデイト云。」を字句通り解釈したものであろう。それでは、当時のシャム、現在のタイは、どのような黄褐色系の土または岩石、鉱石が産出して来たであろうか考えてみよう。

タイ中央部のコーラート高原では赤褐色の岩石(鉱石) Laterite ラテライト(紅土)が採れる。タイの仏教寺院も基壇部や壁等にこのラテライトを用いることが多いと聞く。(同様に、カンボジアのアンコールワットにもラテライトが使われている¹⁰⁾。

源内「前掲書」では、「研テ画色ニ用テ」すなわち、研ぎ出して顔料として用いることが述べられている。このことから類推して塊状の岩石か土であることが分かる。

木下亀城『原色鉱石図鑑』(保育社 1971 p. 76)に依ると、ラテライトは「熱帯地方に特有な土壤で結晶質または非晶質の水酸化鉄および水酸化アルミニウムを主成分とする。赤褐色で塊状、^{くさび}鋳鑄状、豆状、細胞状をなす。」と云う。

木下「同上書」(p. 164)に依れば、ボーキサイトとラテライトの関係は以下のようになる。

「ボーキサイトはかつては $\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ に相当する化合物と考えられていたが、其後の研究によりベーム石 $\gamma\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$ とギブサイド即ちハイドラージライト hydrargillite $\gamma\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 3\text{H}_2\text{O}$ の混合物に過ぎぬことが明かにされた。その一つは熱帯的気候の下でアルミニウムに富む岩石の特殊な分解作用に依るものと考えられるが、熱帯の分解岩石の残留物で酸化鉄に富むものはラテライトといい、この種のボーキサイトはラテライト式ボーキサイトと称される。今一つは石灰岩台地の表面を蔽って産するもので、赭土 terra rossa のアルミニウム質のものとみられ、赭土式ボーキサイトとして区別される。」

さて、「コラルド」はボーキサイトでありそうだが、酸化鉄を多量に含む粘土や赤鉄鉱などである可能性が無いわけではない。しかし、源内「前掲書」で同一物を項目を変えて重複掲載した筈は無いと思われるので、次章で調べてみよう。

2. 源内『物類品鑑』「卷之二」, 「石部」に著された「蛮産」顔料について

『物類品鑑』「卷之二」, 「石部」には「黄石脂」, 「赤石脂」, 「代赭石」の各項目があり、また、「コラルド」に隣接して、「カナノナル」, 「ロートアールド」, 「ポットロート」が記されている。これらのうちの酸化鉄を多量に持つ顔料とも「コラルド」は異なる筈である。『物類品鑑』には以下の記述がある。なお、引用は前掲の『平賀源内全集』上巻 (pp. 45-46) に依る。

「カナノナル 和産ナシ カナノナルハ南蛮語ナリ紅毛ニテハ ブルートステイント云ブルートハ血ナリステインハ石ナリ (後略)」

「ロートアールド 和名 石筆 紅毛人赤色ヲロート、云アールドハ土ナリ是ヲ刮リテ筆ノゴトクニテ字ヲ書スルニ硯墨ヲ用ズシテ甚ダ便ナリ (後略)」

「ポットロート 和名黒石筆 紅毛人持来ル 和産ナシ」

「カナノナル」の説明では芳賀「前掲書」(p. 147)に「ブルートステイン」を「bloed steen」であり、「hematite, 赤鉄鉱のことらしい」としている。これは以下に述べる Thompson 説を採る場合には正しい。

Bloodstone については前掲のチェンニーニ著、中村訳『藝術の書』(p. 67)でも「血石」と第2章の42節で説明している。Thompson, *The Craftsman's Handbook "Il Libro dell'Arte" Cennino d'Andrea Cennini*. (1993)の1960年改訂版(New York, Dover Pub. p. 25)に依れば、その節の表題“ON THE CHARACTER OF A RED CALLED HEMATITE”のHEMATITEの注記に“Amatisto, o ver amatito : >Greek *λίθος αίματινης*, from *αίμα*, 'blood.'αίμα が血を意味することから、bloodstoneとし、ヘマタイトとしたと思われる¹¹⁾。

「ロートアールド 和名 石筆・・・」を芳賀「前掲書」(p. 140)は「roodaard」で、英語では「ruddle, red ocherつまり代赭石」とであるとす。妥当な解釈であるが、源内の説明を考慮すれば、むしろ赤チョーク(フランス語で sanguine サンギーヌ)とすべきであろう。

「ポットロート 和名 黒石筆・・・」を芳賀「前掲書」(p. 148)は「potlood 石墨黒鉛」とする。これも同氏の記すようにオランダ語としても正しい。

因に、graphite（石墨）をドイツ語でも Pottlot と云う。木下「前掲書」（p. 50）に依れば、「炭素Cであるが、天然に産するものは常に若干の水分および、 Al_2O_3 、 SiO_2 、 Fe_2O_3 などの不純物を含む。」と記される。

ゲッテンス、スタウト著、森田訳「前掲書」（p. 112）に依れば、「1891頃からは炉を用いて人工的にも作っている（アチソン法）。^{グラファイト}石墨はかなり以前から筆記用の素材として用いられているが、その語源は多分ギリシャ語の *γράφειν*（書くこと）のようである」と説明がある。

また、『物類品鑑』巻之二（『平賀源内全集』）「石部」に、「黄石脂」、「赤石脂」（p. 28）、「代赭石」（p. 33）がある。「黄石脂」の説明「ホウリスアルメニア」は英語で *armenian bole* すなわち、箔置きの際に、箔下砥の粉として使われるアルメニア産の珪土である。光沢ある金箔の処方にも用いられる。チェンニー「前掲書」第5章132章（邦訳補訳、藤井久栄 p. 145）にもその記述がある。

「赤石脂」も「黄石脂」と同様に酸化鉄を含む陶土である。「代赭石」は天然の赤鉄鉱で *hematite* の一種であるが、酸化鉄の他に少量の過酸化マンガと土類を含む。

なお、『物類品鑑』巻之二、「石部」には医薬品としての「ペレシピタート」と「ヒッテリヨウルアルビイ」がある。（『平賀源内全集』p. 46）「ペレシピタート」は芳賀「前掲書」で「*precipitaat*」とし「促進剤」くらいの意味であろう」としているが、水銀と胆礬を作用させて作るという源内の説明からは、酸化水銀で船底塗料等に用いられる赤または黄の顔料であると思われる。*Eastlake, Methods & Materials of Painting of the Great Schools & Masters. Vol. 1. (Dover Pub. 1960 p. 355)* では、*precipitate* を *Oxide of Mercury* として説明する。「ヒッテリヨウルアルビイ」も皮膚病などの薬らしいが、おそらく、オランダ語の *Vitriool*（硫酸、硫酸塩）と関係があると思われる。

さて、「コヤルド」に論を戻そう。「コヤルド」が上述の赤チョーク（サンギーヌ）、ヘマタイト、代赭石、黄石脂、赤石脂のいずれでもないとするれば、ラテライトか赭土式ボーキサイトの可能性が高いと思われるのである。

3. 曙山「図画理解」の「丹青部」著された「番（蕃）産」顔料について

イ. 「ウエウレルトアウブ」について

佐竹曙山『図画理解』の「丹青部」に「ウエウレルトアウブ」と云う顔料名が記されている。その説明は以下の通りである。引用は、平福「前掲書」（p. 25）による。

「ウエウレルトアウブ

阿蘭陀人持来ルモノニテ、甚得カタシ。黄色土ニ似テヤヤ黒シ。漢名不詳。」

「ウエウレルトアウブ」に類似の記述は、源内「前掲書」には見当たらない。

先ず、「ウエウレルト」と「アウブ」を分けて考えてみよう。「ウエウレルト」に似た記述が司馬江漢『春波楼筆記』（1811、文化8）に見られる。『日本随筆大成2』（たんちょう社 1975）p. 58を参考にすると、「蘭癖家、福知山侯の竜橋朽木隠岐守が愛蔵する蘭書」の「ウエイレルト・ベシケレイヒング」〔世界誌〕と云う記述がある。現代のオランダ語に直すと、*wereld-beschrijving* になると思われる。「ウエウ」と「ウエイ」の違いを考慮しなければ、「ウエウレルト」は *wereld* となる。このオランダ語は「世界」、「地球」、「土」の意味を持つ。すなわち、英語の *world* に相当する。他に考えられるのは、英語の *fuller*（縮絨工）に相当するオラ

ンダ語の voller である。

「アウプ」については、オランダ語の aap (猿), harp (弦楽器のハーブ), aardpek (ビチューメン bitumen), 英語の herb (オランダ語では kruid), フランスの地名の apt (黄土の産地) くらいしか考えつかない。しかし、発音と意味の上から判断して、いずれもが不自然である。

英語の fuller's herb は別名 weld (wald, gaude, arzica) という植物染料であるが, p. c. c. s. のトーンで云えば, 白地上での発色はライトグレイッシュ (明るい灰味の) トーンとパール (うすい) トーンの間にある黄緑色であることが, 福田「前掲書」(p. 66) で明らかであり, 「ウエウレルトアウプ」とするには無理がある。

fuller's earth (フラー土) はどうであろうか。オランダ語に直しても, fuller's が「アウプ」とならないので, この可能性は乏しい。

黄土の一種であると仮定すれば, ゲッテンス, スタウト著, 森田訳「前掲書」(p. 132) の「Ochre」の項目にあるように, 前述の「フランスの最良質オーカーの産地」, 「^{ヴォークルーズ}Vauclus 県, Apt」の黄土である可能性もある。いずれにしても, Gold Ocher, Raw Umber, Raw Sienna, Bohemian Green Earth の幅でこの色を考えるのが妥当であろう。

ロ. その他の「番(蕃)産」顔料について

「丹青部」に示された「番(蕃)産」の顔料にその他, 「ブラアウインデク」, 「臙脂」, 「麒麟竭」(平福『前掲書』p. 25) があるが, 順にインディゴブルー, ラック貝殻虫の樹脂状分泌物から作った染料系の顔料, リュウケツ樹から採った赤色樹脂 (Dragon's Blood) である。

「ブラウインデク」については, 外山「前掲書」(pp. 118-9), 西村 貞「佐竹曙山の西洋画論」, 『大和文華』(6号 1952 p. 45) が示すそれぞれ, 「blawindigo」, 「Indigo Blue」が正しい。

〔注〕

- 1) 〔文献目録〕および本文中の引用文献を参照されたい。
- 2) 源内の記述では「コラルド」, 曙山では「コラルト」となっている。
- 3) 平賀源内先生顕彰会編『平賀源内全集』上巻(名著刊行会 1970)に『物類品鑑』1763(宝暦13)が掲載されている。(初版は入田整三編, 1932, 1934。)江戸時代の原本では, 「鑑」の字が「隣」となっているが, 本稿では本字の「鑑」に統一する。
- 4) 『平賀源内全集』上巻(p. 34)の『物類品鑑』参照。なお, 源内は「蛮産」, 曙山は「番産」の語を用いる。「番」は「蕃」の意である。
- 5) 曙山「画図理解」の「丹青部」の「石緑 倭名 イハロクシヤウ」の項目は, 平福「前掲書」(p. 24)で確認することができる。「石緑」を「岩緑青」すなわち malachite マラカイト(孔雀石)とする。また, 説明の中で, 「此物用フ少シヘルレンへ, 藤黄ヲ和シテ此ノ色ヲナス。」と, ベルリン青とガンボージの混色で同色を作る方法を記す。これは, ゲッテンス, スタウト著, 森田訳「前掲書」(p. 111)に示されている Hooker's Green に他ならない。(現在, アクリル絵具と顔料の色名に残っている。)

源内「前掲書」でも, 「緑青」の項目で「石緑-岩緑青」の説明がある。(『平賀源内全集』上巻(p. 34))

- 6) 青木 茂「油絵初学明治十四, 五年——油絵具と油絵技法」, 『油絵初学』(筑摩書房1987) pp.

178-180に高橋由一の油絵「江堤」（明治14）についての『朝野新聞』批評記事中、望月有作の指摘に「樹の」枝の黒い部分はビチュームとベルヂグリーをまぜて塗ってある」とする紹介がなされている。

しかし、その後は余り使われなくなったことを推定させる資料がある。『洋画手引艸』（1898、前掲、17ウ）の「緑色」の項目には、「Vert-de-gris, Emerald green」として「醋酸銅、所謂緑青なり。変色す。」と説明がある。これは、塩基性酢酸銅である緑青と、1814年に発明されたアセト亜砒酸銅とを混同している。

ヴェルデグリーはエメラルドグリーンの原料としてしばしば用いられたが、次第に顔料や絵具としては使われなくなったために、以上の混同が生じたものと思われる。

- 7) ゲッテンス、スタウト著、森田訳「前掲書」p. 166「Verdigri」参照。
- 8) ゲッテンス、スタウト著、森田訳「同上書」p. 110-11参照。
- 9) p. c. c. s. とは Practical Color Coordinate System（日本色研配色体系）の略称である。
- 10) 杉下龍一郎「タイ国仏教寺院壁画に用いられた顔料について」、『古文化財の科学』28号（1983）pp. 20-28を参照すると、タイの仏教寺院壁画の描かれた壁体にはしばしばラテライトが使われている。しかし、ラテライトが顔料として使われたとする確認はされていない。また、井川一久「亡びゆく美神の涙」、同氏編『危機に立つアンコール遺跡』（朝日新聞社 1990）p. 68では、「アンコール遺跡群の建材は、一般に基礎がラテライト（硬質紅土）、上部・表面構造が砂岩か紅色煉瓦」であると云う。
- 11) 現在イタリア語では、ヘタマイトは ematite、アメジスト（紫水晶）は ametista となる。チェンニーニの「血石」をトンプソンは前者、中村訳（藤井久栄補訳）は後者を取っている。（おそらく、Motte の仏訳が後者を取っているのであろう。）

【参考文献】

- 小野忠重「江戸時代の油性画材の資料について」、『東京芸術大学美術学部紀要第4号』（1968）
- 小野忠重『司馬江漢』（新日本出版社 1977）
- 西村 貞「佐竹曙山の西洋画論」、『大和文華』6号（大和文華館 1952）
- 武埴林太郎「秋田蘭画の表現技法について」、『秋田大学紀要23号』（1973）
- 武埴林太郎「佐竹曙山・小田野直武の洋画習得に関する一考察」、『美術研究』（早稲田大学美術史学会 1966）
- 武埴林太郎、成瀬不二雄「小田野直武と司馬江漢の関係について」、『美術史』70号（美術史学会 1968）
- 成瀬不二雄『曙山・直武』（三彩社 1969）
- 河西万文『画人司馬江漢の研究』（岩森書店 1982）
- 藤岡作太郎『近世絵画史』（ペリかん社 1983）（初版、金港社 1903）
- 司馬江漢「春波楼筆記」、『日本随筆大成』第2巻（吉川弘文館 1975）
- 城福 勇『平賀源内の研究』（創元社 1976）
- 久保亮五、長倉三郎、井口洋夫、江沢 洋編『理化学辞典』（岩波書店 1987）
- Harley, *Artist's Pigment's C. 1600-1835*. Second Edi. (Butterworths, 1982)
- F. G. Reinier, *Dutch Dictionary (Dutch-English, English-Dutch)* (Routledge & Kegan Paul, 1987)